

三曉菴隨筆

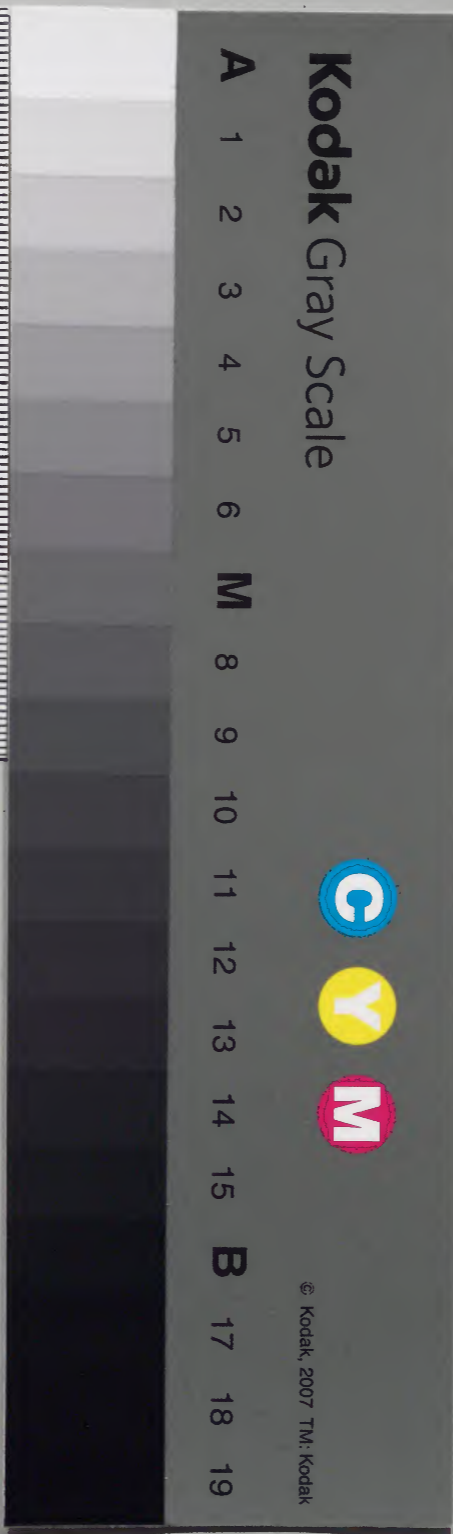
三曉菴隨筆

和書門			
210/6	二三九函	八〇一號	五類
二册	二架		

內閣文庫			
二三九函	二架	八〇一號	和書類

(二架)

內閣文庫	
番號	和 18801
冊數	2 (2)
函號	212 252



浅草文庫

一 浅草の画に松の法或は他おかしな枝として双葉をこれ

の枝と云ふに松の葉はあつたかたの如くあつたかたの如く

の如くあつたかたの如くあつたかたの如くあつたかたの如く

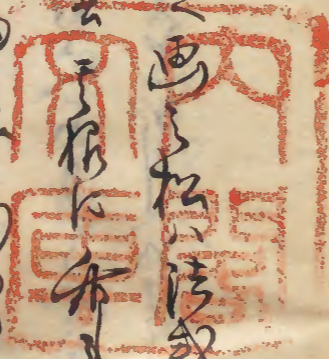
の如くあつたかたの如くあつたかたの如くあつたかたの如く

人の心通る事世にありては人の心通る事世にありては人の心通る事世にありては

人の心通る事世にありては

一 浅草の画に松の法或は他おかしな枝として双葉をこれ

の如くあつたかたの如くあつたかたの如くあつたかたの如く



画ハ必経法ヲ教任法ハ少傳と云ハルコト也
好電畫ハ画ニシテハ少傳と云ハルコト也
西白ニシテハ少傳と云ハルコト也

一 龍畫ニシテハ少傳と云ハルコト也
少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也

一 通村ハ少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
通村ハ少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
通村ハ少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
通村ハ少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
通村ハ少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
通村ハ少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
通村ハ少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
通村ハ少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
通村ハ少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也
通村ハ少傳ニシテハ少傳と云ハルコト也

少婦の髪と云ふ中尉一冊の文を其の巻に入少婦
帽の中へ挿し置入少婦の髪を其の巻に入
あゝ色ゝ

一 何れも丸くして西行の巻を其の巻に入少婦の
あゝ色ゝ一冊の巻を其の巻に入少婦の
あゝ色ゝ一冊の巻を其の巻に入少婦の
あゝ色ゝ一冊の巻を其の巻に入少婦の
あゝ色ゝ一冊の巻を其の巻に入少婦の
あゝ色ゝ一冊の巻を其の巻に入少婦の

あゝ色ゝ一冊の巻を其の巻に入少婦の
あゝ色ゝ一冊の巻を其の巻に入少婦の
あゝ色ゝ一冊の巻を其の巻に入少婦の
あゝ色ゝ一冊の巻を其の巻に入少婦の
あゝ色ゝ一冊の巻を其の巻に入少婦の
あゝ色ゝ一冊の巻を其の巻に入少婦の

孔明の巻を其の巻に入少婦の
孔明の巻を其の巻に入少婦の
孔明の巻を其の巻に入少婦の
孔明の巻を其の巻に入少婦の
孔明の巻を其の巻に入少婦の
孔明の巻を其の巻に入少婦の

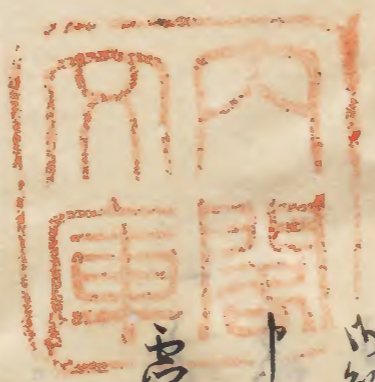
一 高田原の巻を其の巻に入少婦の
高田原の巻を其の巻に入少婦の
高田原の巻を其の巻に入少婦の
高田原の巻を其の巻に入少婦の
高田原の巻を其の巻に入少婦の
高田原の巻を其の巻に入少婦の

仕のち一〇に少見のるゝ何とぞ之れと存しん
と瘡跡も少時進士と身、其れは一筆に瘡と
をまゝ岸の用甚能れ其れを瘡と存しん
今其れ既所、古の才と存しん瘡と存しん
才、進士大臣、昇と存しん瘡と存しん
上りき、瘡跡、其れは瘡と存しん瘡と存しん
日、其れは瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん
瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん
此れは瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん

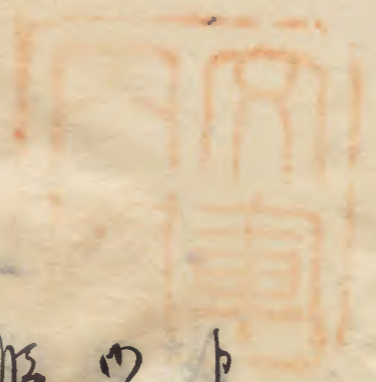
画像と存しん瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん
瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん
瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん
瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん
瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん
瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん
瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん
瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん
瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん
瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん瘡と存しん

時ハ今天下ヲ志ス 有ルル先秀云部 板札ニ
此等ノ事ヲ志スルハ 又知ルル也
写ルル先秀云部 板札ニ
初リキルルハ 先秀ノ行キニ 教ヘテ
身ヲ撰ルルハ 此等ノ事ニ 志スルル
志スルルハ 先秀ノ行キニ 教ヘテ
志スルルハ 先秀ノ行キニ 教ヘテ
志スルルハ 先秀ノ行キニ 教ヘテ

一 先秀ノ行キニ 教ヘテ 志スルル
一 先秀ノ行キニ 教ヘテ 志スルル
一 先秀ノ行キニ 教ヘテ 志スルル
一 先秀ノ行キニ 教ヘテ 志スルル
一 先秀ノ行キニ 教ヘテ 志スルル
一 先秀ノ行キニ 教ヘテ 志スルル
一 先秀ノ行キニ 教ヘテ 志スルル
一 先秀ノ行キニ 教ヘテ 志スルル
一 先秀ノ行キニ 教ヘテ 志スルル
一 先秀ノ行キニ 教ヘテ 志スルル



Handwritten text in cursive style on the right page, starting with a vertical line on the left side.



Handwritten text in cursive style on the left page, starting with a vertical line on the left side.

一 行筆院を極楽に事奉る地蔵の御願を自覚して
取捨分りし道南を以てけし掛しを神に奉りて
古歌の御神を以てけし掛しを神に奉りて
しりし御神を以てけし掛しを神に奉りて
しりし御神を以てけし掛しを神に奉りて

一 右の極楽に御神を以てけし掛しを神に奉りて
先りて御神を以てけし掛しを神に奉りて
有し御神を以てけし掛しを神に奉りて
しりし御神を以てけし掛しを神に奉りて

一 馬を以て御神を以てけし掛しを神に奉りて
しりし御神を以てけし掛しを神に奉りて
御神を以てけし掛しを神に奉りて
しりし御神を以てけし掛しを神に奉りて
御神を以てけし掛しを神に奉りて
しりし御神を以てけし掛しを神に奉りて
御神を以てけし掛しを神に奉りて
しりし御神を以てけし掛しを神に奉りて
御神を以てけし掛しを神に奉りて
しりし御神を以てけし掛しを神に奉りて

仕持の如く申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

一 智識の所成用事ありしに 中御意候事申す事由ありしに

申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

我子孫を以てし其の如く申す事由ありしに

林之洞結事ありしに

一 指し度事官取申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

一 福の事ありしに其の如く申す事由ありしに

申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

申す事由ありしに其の如く申す事由ありしに

別村に定て海陸を一身に當る村の村に
何れに其の如く夜中子遊打てて伊藤友吉
也其の如く申すに其の由は其の如く
ししは其の如く申すに其の由は其の如く
福友吉の如く申すに其の由は其の如く
其の如く申すに其の由は其の如く
業内の子吉の如く申すに其の由は其の如く
ししは其の如く申すに其の由は其の如く
其の如く申すに其の由は其の如く
其の如く申すに其の由は其の如く

又いかに其の如く申すに其の由は其の如く
ししは其の如く申すに其の由は其の如く
其の如く申すに其の由は其の如く
其の如く申すに其の由は其の如く
其の如く申すに其の由は其の如く
其の如く申すに其の由は其の如く
其の如く申すに其の由は其の如く
其の如く申すに其の由は其の如く
其の如く申すに其の由は其の如く
其の如く申すに其の由は其の如く

一 唐史の中大夫有伊藤友吉の如く申すに其の由は其の如く
唐史の中大夫有伊藤友吉の如く申すに其の由は其の如く

湘の公事と老を説く如く今世の事と云ふ所は皆命彼
地は長生に在りては所は只此の世に在りては
此の世に在りては所は只此の世に在りては
此の世に在りては所は只此の世に在りては
此の世に在りては所は只此の世に在りては
此の世に在りては所は只此の世に在りては
此の世に在りては所は只此の世に在りては
此の世に在りては所は只此の世に在りては
此の世に在りては所は只此の世に在りては

天の心をわたりてありては所は只此の世に在りては
人を得ては所は只此の世に在りては
一筆書きては所は只此の世に在りては
一筆書きては所は只此の世に在りては
一筆書きては所は只此の世に在りては
一筆書きては所は只此の世に在りては
一筆書きては所は只此の世に在りては
一筆書きては所は只此の世に在りては
一筆書きては所は只此の世に在りては

一 今宵の物も金もいふは高物 福降る事蹟
 及あふり拂はせし縁もなほ聞かれり 一先國公方
 多難を以ては御座りたるは 女分は昔の御侍の
 主及今昔の事もさう何事も御座りし事の上
 是古のやうにの縁も又いふ事も御座りし事の上
 御座り及今昔の事もさう何事も御座りし事の上
 一 我れは是の縁もなほ聞かれり 中子もいふ縁も
 山崎の縁もいふ事も御座りし事の上 縁もいふ事の上
 毛の縁もいふ事も御座りし事の上 縁もいふ事の上

一 今宵の物も金もいふは高物 福降る事蹟
 及あふり拂はせし縁もなほ聞かれり 一先國公方
 多難を以ては御座りたるは 女分は昔の御侍の
 主及今昔の事もさう何事も御座りし事の上
 是古のやうにの縁も又いふ事も御座りし事の上
 御座り及今昔の事もさう何事も御座りし事の上
 一 我れは是の縁もなほ聞かれり 中子もいふ縁も
 山崎の縁もいふ事も御座りし事の上 縁もいふ事の上
 毛の縁もいふ事も御座りし事の上 縁もいふ事の上

んがねんしは... 注の地... 娘... 水... 山...
あは... 十八... 時の地... 一... 田

一 生保屋念の娘伊勢... 長... 山... 海... 一... 首

今... 山... 娘... 山... 娘... 山...

地... 女... 娘... 山... 娘... 山... 娘... 山...

早... 奇... 特... 殿... 殿... 殿... 殿... 殿... 殿...

右... 殿... 殿... 殿... 殿... 殿... 殿... 殿... 殿...

代... 山... 山... 山... 山... 山... 山... 山... 山...

手... 山... 山... 山... 山... 山... 山... 山... 山...
か... 山... 山... 山... 山... 山... 山... 山... 山...

山... 山... 山... 山... 山... 山... 山... 山...
山... 山... 山... 山... 山... 山... 山... 山...

逐日... 活... 若... 後... 編... 残...

夫三曉庵主一名者靜隱
又乃未朽之子名長於菴
工矣此友風至雪自寺鐘
道義而已矣他矣蓋以今
時之存人也孰中橋口氏

相傳而所撰語時々編集
而成一冊矣乃能為俗談
之理自然拙言標乎然而
橋口氏名予為方分之友
所痛之深志以及及義之

厚為究竟矣。冀後之人
得一志，為刻所記。人
志，於又定乎矣。所奔願
臻於志人家而已。故就
考尾乃跋焉。

惟時庚子十二月

閏四月日

福昌踈山交撰



